

展示品一覧

○ 特別地域図「琵琶湖図」 国宝：地図・絵図類 番号 1 1 2

文化4(1807)年 縮尺108,000分の1 123.4×103cm
特別地域図は大図、中図、小図とは異なる縮尺を用いた、観賞用、贈答用とされる華麗な地図である。いずれも第5次測量を終えた文化4年に作成された。忠敬の「江戸日記」には三個所ほど「琵琶湖図」の記載がある。文化4年3月1日には「巖島、天橋立、琵琶湖図持参曆局へ行く。夫れより桑原へ回り八ッ頃帰る」とあり、高橋景保や桑原隆朝に下見をしてもらった様である。3月29日には「巖島、天橋立、琵琶湖、浜名湖図持参浅草御役所へ行く」とあり最終的に提出している。文化8年11月29日に「嵩山社碑銘、並びに白川侯副碑銘、阪本林平より来る。且つ、此方よりも琵琶湖の全図遣す。」とあり贈答に用いられている。なお、伊能忠敬記念館には琵琶湖(国宝の地図・絵図類番号112と113の2幅)、巖島(同114)、天橋立(同115)、が残されている。

この図は「琵琶湖図」といいながら、若狭湾を含む近畿地方一円を描いている。ミュージアムグラスで見ると細部まで名所などが書き込まれている。京都には二条城、北野社、東寺の五重塔などが、大阪には大阪城はもちろん天王寺、天満天神、安治川の京橋、天満橋、天神橋、難波橋が書き込まれている。



千葉県香取市伊能忠敬記念館所蔵

○ 大図(滋賀県の木之本・福井県の敦賀・越前岬・蒲生) 「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図 第十一〈自木本／至蒲生〉」

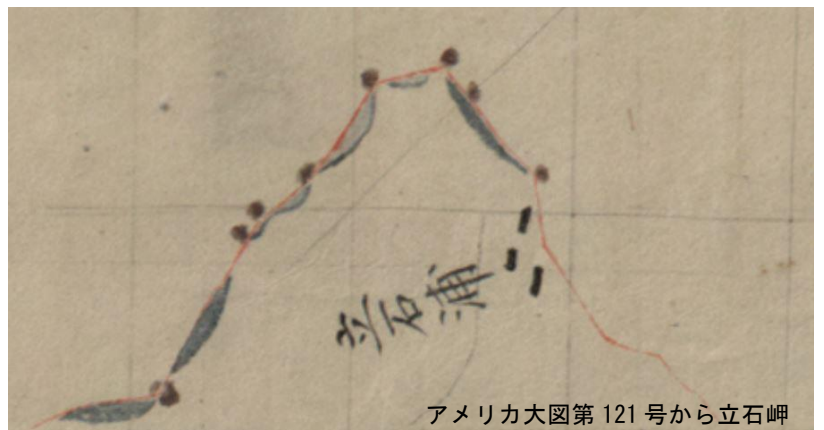
国宝：地図・絵図類 番号 2 5、文化元年8月1日上呈 縮尺36,000分の1

第四次測量の享和3年5月25日～6月11日の滋賀県の木之本から北国脇往還を敦賀に向かい、越前海岸を北上し越前岬から蒲生までの測量成果の大図である。

敦賀からは敦賀湾の西側を越前国敦賀郡と若狭国三方郡との国界まで測量している。享和3年5月30日の測量日記によると、敦賀原発の立地する立石岬周辺で「海岸、舟にて、長縄を用て測る」とある。6月1日に国界に到着したが、「界に小滝あり。前後左右、大岩石にて、測量印杭の建置場所なし。故に滝口へ攀(よじ)上りて、測量印杭を建置」ことになった。その後敦賀から越前海岸を北上したため、この大図の側線は枝線となり閉じていない。越前・若狭の国界の測線が繋がったのは第5次測量の文化3年10月8日の「去る亥年測量留杭迄測」によってであった。

越前測量では隊員が次々と麻疹にかかり、6月3日には、病人は駕籠や舟でその日の宿舎まで送り、忠敬と伊能秀蔵の二人で測量を続けている。

北国脇往還の木之本宿や坂口村の現在の様子については、『会報』84号の拙稿「伊能探訪 - 若狭・北近江の旅 -」で紹介した。



アメリカ大図第121号から立石岬

○ 広域下図（丹後半島：兵庫県豊岡市～京都府京丹後市）

「自但馬国美含郡竹野村至丹後国与謝郡本荘浜村下図」 国宝：文書・記録類 番号300

伊能忠敬記念館の『伊能忠敬関係資料目録 下図』（以下『下図目録』と略す）によると、縮尺36,000分の1で、94.5×161.5cmの広域下図であり、裏面には「門倉速第14」と朱書されているとのことである。表には「南6寸9分3厘5毛 西4尺2寸5分4厘2毛」と朱書されている。地名と測線は墨書、天測個所は星形の朱印が押されている。

豊岡や出石などの内陸部に測線が無いので、第5次測量の文化3年8月24日～9月2日の成果で、文化4年12月18日に提出された大図の下図であろう。最終上呈版によるアメリカ大図とは図割が少しずれ、123号に124号の一部を加えた範囲となる。この大図は現存しないので、中図ではあるが徳島大学附属図書館貴重資料高精細デジタルアーカイブの「大日本沿海図稿 巻 五畿東海」の該当部分が参考となる。

忠敬と坂部が文化3年8月23～26日と連泊した湯嶋村について、測量日記には「湯嶋は温泉ありて入湯の人群集す」とある。現在の城崎温泉である。また風光明媚な久美浜測量については『会報』47、48号の松田昭二氏の「久美浜に於ける伊能測量」に詳しい。

○ 広域下図（若狭湾：高浜町・小浜市・三方五湖・敦賀市）

「自越前国敦賀郡榑林村至若狭国大飯郡上瀬村下図」

国宝：地図・絵図類 番号313

『下図目録』によると、縮尺36,000分の1、89.2×159.8cmの広域下図である。裏面には「下河辺 速第16」と朱書されているとのことである。表には「南北7寸7分2分 東西4尺8寸1分」と墨書されている。測線は墨書、地名などは朱書きである。この図もまた第5次測量の文化3年9月17日～10月6日の成果で、文化4年12月18日に提出された大図の下図であろう。

若狭湾の入り組んだ海岸線は下図で見ると、どこが陸地で海なのか区別が付かず、どこが描かれているかも判然としない。右の三方五湖周辺の伊能大図彩色図のような手がかりが不可欠である。



○ 広域下図（熊野灘：三重県紀北町・尾鷲市・御浜町）

「自紀伊国牟婁郡阿田和村至紀伊国牟婁郡嶋勝浦下図」 国宝：地図・絵図類 番号310

『下図目録』によると、縮尺36,000分の1、81.2×159.2cmの広域下図である。第5次測量の文化2年6月19日～7月2日までの測量成果であり、アメリカ大図とは図割が異なる。

6月19日には尾鷲の大庄屋土井徳蔵が舟で出迎えた。この土井徳蔵が残した伊能測量隊に関する村方文書群は、会報62号、63号、64号で紹介され、測量隊を迎える側の情報収集や対応の様子をよく伝える。

6月24日の測量日記によると、海辺の測量の大難所のため、船での引き縄測量も困難な場所では、「舟中、羅鍼を以て見取測」で済ませた。この下図には、墨書で「都而見取なきの分 朱引可略」（すべて見取なきの分、朱引略すべし）と記されている。「羅鍼を以て見取測」までは実測の範疇であり、朱の測線を引けると言うことか。この下図を見ると、多くの岬の海岸線は点線で表現され、測線は岬の根元部分だけである。25日と26日には富士山を測量するために九木岬の灯明堂に登ったが、四方地平を雲がおおい空しく帰る事になった。下図には九木岬の先端近くに「灯明堂」と記されている。なお、25日の測量日記の最後に「市野此日より病氣」と記されている。天文方下役の市野金助の「病氣」については、会報64号で詳細が明らかになった。



○ 広域下図（和歌山県串本町～田辺市）

「自紀伊国牟婁郡江田浦至紀伊国牟婁郡田辺城下下図」

国宝：地図・絵図類 番号311

『下図目録』によると、縮尺36,000分の1、94.7×138.9cmの広域下図である。第5次測量の文化2年7月15日に有田浦を出発してから、7月24日に田辺城下に到着するまでの測量成果である。市野金助は独断で出した心得触れをめぐり忠敬と対立し、病気として測量業務から離れた。大阪から帰府するまでは、宿舎も多くは別宿で、測量隊と付かず離れずの単独行動となった。忠敬は測量日記に市野の別宿先を律儀に記録している。7月17日には恵住浦で「波濤高く測量なり難きにつき逗留」となったが、市野は「長病気別宿」のところ、連絡不十分で「間違出立」となり、次の宿泊地に行ってしまった。



○ 広域下図（大阪府南部：岬町・泉佐野市・堺市）

「自和泉国日根郡小島村至和泉国住吉郡・大島郡堺町下図」 国宝：地図・絵図類 番号316

『下図目録』によると、縮尺36,000分の1、86.4×169.9cmの広域下図である。第5次測量の文化2年7月13日に泉州に入り、17日に堺に到着するまでの測量成果である。この下図全体について「従紀泉州界至堺 北2尺6寸9分2厘4毛 西3尺2寸7分7厘3毛」と朱書され、区間ごとに縦軸と横軸が朱線で引かれ、その長さが下図上に記入されている。

○ 小区域下図（静岡県島田市～掛川市）

「自駿河国道悦島村至遠江国榛原郡金谷駅下図」 国宝：地図・絵図類 番号186

『下図目録』によると、縮尺1/36,000、31.5×48.0cmの小区域下図である。下図の範囲は、第5次測量の文化2年3月12日に先発隊の高橋善助、市野金助、平山郡蔵が測量した道悦新田から大井川を越えて金谷宿までである。大図作成に必要な情報を整理してつくられた広域下図に比べると、小区域下図は作図のための情報が豊富に書き込まれており、個性的でもある。次の図は、アメリカ大図111号の島田宿の部分に、この下図に記載された情報を朱書きで書き加えたものである。大図では大井川までの間に「島田」「島田宿向島」「島田宿甚兵衛島」という地名が記されているだけであるが、この下図では、人家の有無、一里塚、制札なども記されている。

この下図では東西方向、南北方向の長さに関して、計算上の長さとは下図上の長さの誤差についても触れ、東西方向は下図よりも9毛ばかり長く、南北方向は1厘9毛長いと記している。



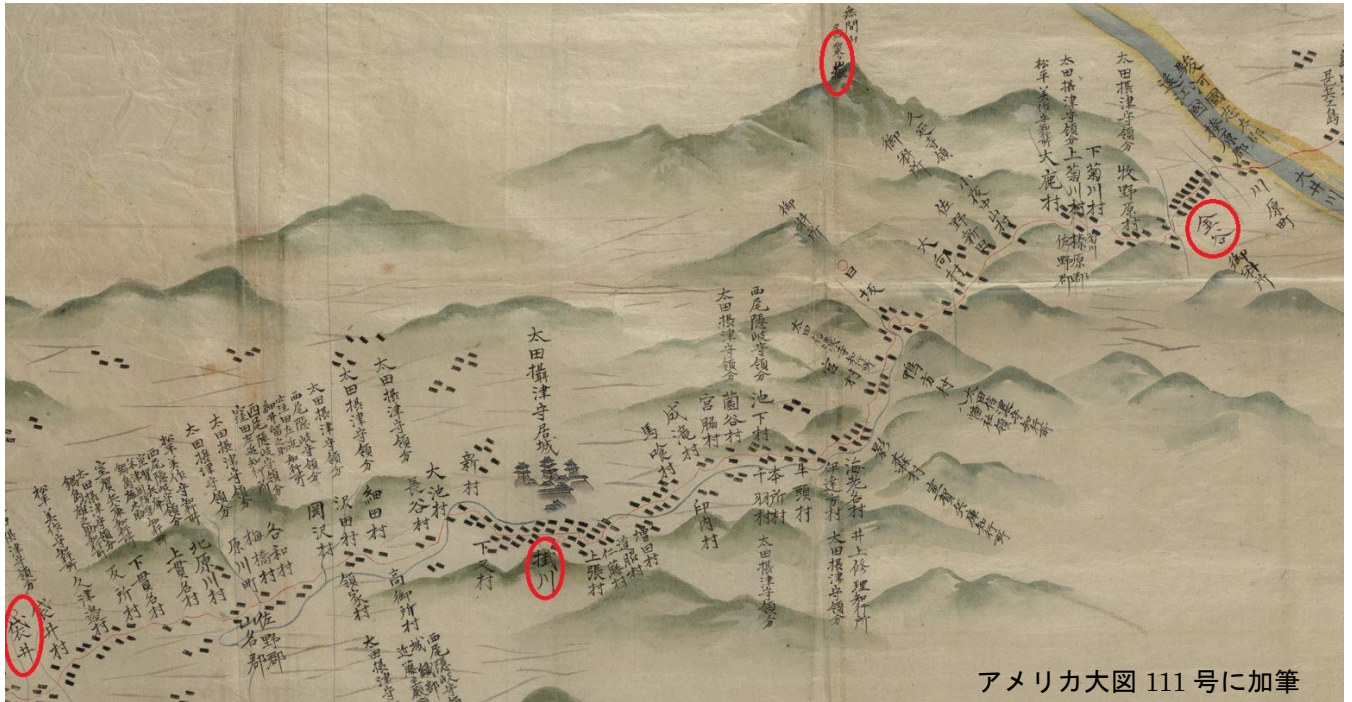
アメリカ大図111号の島田宿に加筆

○ 小区域下図（静岡県島田市～掛川市）

「自遠江国榛原郡金谷宿至遠江国佐野郡掛川宿城下下図」 国宝：地図・絵図類 番号187

『下図目録』によると、縮尺1/36,000、32.6×47.7cmの小区域下図である。測線や地名は墨書され作図用の縦軸・横軸は朱書されている。小区域下図を作るときは、最初に2寸間隔で平行線を白径（へらのようなもので和紙上に痕跡を付けることを「白径」という）で引いておき、分度器を使用する際の基準とする。この下図では、光の角度によるが白径が確認できる。粟ヶ岳には6本の朱の方位線が集まっている。

東海道24番目の宿場町金谷宿は大井川を川越した西岸に位置する。下図は金谷宿本陣から小夜の中山の峠を越え日坂宿をへて掛川城下本陣までの範囲である。文化2年3月14日五ツ頃に金谷宿を出立し、先手と後手に別れて測量し、二手共に八ッ前後に掛川城下に到着した。この1日分の行程の下図である。



○ 小区域下図（静岡県島田市・掛川市・袋井市）

「自遠江国榛原郡金谷宿至遠江国山名郡袋井宿下」 国宝：地図・絵図類 番号181

『下図目録』によると、縮尺1/36,000、64.4×47.6cmの小区域下図である。下図の上段に金谷から掛川まで、下段に掛川から袋井までを分割して描いている。上段は187番の下図と同じ範囲であり、下段に描かれた掛川から袋井までは、文化2年3月15日に忠敬たち後発隊の測量した部分である。